

東日本家族応援プロジェクト 2020 in むつ リモート を開催しました！

人間科学研究科教授 村本邦子

10 年目となる「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」は、コロナウイルスの影響を受け、リモートで開催、最終年は来年度に持ち越すことにした。毎夏通い続けてきた下北に行けないことはとても残念だったが、どんな形であれ、むつのみなさんとのつながりを持てたことは嬉しかった。むつ市立図書館で漫画展を開催して頂けたことはありがたい。みなさんに直接会えなくても、十年行きますという約束を果たせた感がある。そもそも、このプロジェクトは東日本大震災をきっかけにスタートしたが、ないもの、失ったものではなく、自分たちが持っているものに眼を向け、最大限その力を生かすという姿勢で臨もうというものだった。これをレジリエンスという。コロナ禍においてリモートを使うというのも、この姿勢から生まれたものだった。

リモートならではの良さもあった。プロジェクト院生たちは、通常、一ヶ所の現地に赴き、行ったメンバーの報告を聞いて学ぶという形をとってきた。今回は、リモートということで、むつのチームメンバー以外の院生たちも参加することができた。報告を聞くより、コミットした参加となり、学びも深かったように思う。わずかではあったが、むつの方々のお顔とともに声を聴き、ブレイクアウトルームで短時間でも交流し、パソコン越しであっても生きた出会いができた。また、過去にプロジェクトに参加してくれた修了生たちも参加してくれたことで、院生たちの指針や励みになったようだ。

もちろん、その土地に身を置き、人々と出会い、身体レベルで時空を共有することから得られるものには、どうしても代え難いものがある。その分、「来年は是非むつに行きたい！」という声も複数あがっていて、来年は院生たちとともに訪れることができることを願う。

今年から、院生たちを含む企画委員会を作り、入念な準備をした。プロジェクトの内容の報告も院生たちがまとめてくれたので、下記に続ける。

8月18日午前中は、下北の事前学習(下北の概要・原発・9年プロジェクトの振り返り)をした院生3人の発表。村本先生からあさこハウス・原発関連施設のフィールドワーク、後期課程の河野暁子さんの恐山と口寄せ文化のフィールドワークの発表。

午後は、むつ市の市庁舎とつなぎ、支援者支援プロジェクトの振り返り、次年度の企画会議が行われた。中村先生からプロジェクトの成果と課題の振り返り後、実際にプロジェクトに参加したことのある院生や修了生が、現在このプロジェクトを通して学んだことが対人援助の実践でどう生きているのかという発表があった。むつ市職員からは支援者セミナー開始時の戸惑いと、9年間継続してこられたことへの驚きが語られた。このセミナーを通して、自分たちの地元むつ市の地域力の再発見、協働の重要性が見えてきたという。このプロジェクトが来年で最後を迎えるということもあり、次年度以降についての不安や課題とともに、継続していくことへの抱負が語られた。立命館側からは10年かけて育まれた地域

の力を信じ、地域を中心に継続できる取り組みを応援していきたいと応答があった。

団士郎家族漫画展は、例年通りむつ市立図書館展示ホールでパネル展示が行われた。対面での漫画トークはできなかったが、8月29日オンラインで漫画トークが行われ、教員、院生、青森県内などから33名が参加した。今回は、来年むつ市立図書館でパネル展示する予定の「アースカラーの物語」「ソロ泊」の二点が紹介された。団先生の語りの後にブレイクアウトルームにランダムに分かれ、2～3人でグループセッションを行った。「久々に団先生のお話を聞けて、元気なご様子をみることで、参加できて良かったです。頭と気持ちが活性化する楽しい時間でした。」(50代、女性、5回以上)。「いつもの漫画トークが自宅に居て受けられる新鮮な感覚を楽しみながら参加できました。ご支援ありがとうございました。また、リモートだから参加できた人もいることから、こんな形も良いなあと思う反面、うちのグループで聞いた話や他のグループから出た話題等、同じ会場であれば、漏れ聞こえたり、共有できたかなあと感じました。参加者全員の顔や反応を間近に感じるには、やっぱりリアルトークだと思いました。」(60歳以上、女性、5回以上)。「回を重ねるごとに『へー、そうなんだあ』から『うんうん、わかるわかる、そうだね』になってきました。時代も、人も、そして自分も変わっていているということを毎年この企画に参加することで実感しています。」(50代、男性、5回以上)。「Webだからこそ参加できました。また機会があれば参加したいです。」(40代、男性、初めて)。

今年度の企画全体を通して言えることだが、リモートだからこそ各々の地域からの参加が可能であることの利点と、対面でしか味わえない臨場感や人と人との繋がりやの難しさがあった。コロナウイルスの脅威の中、形を変えて繋がりを継続し、このプロジェクトが開催できたことを関係者の皆様に感謝申し上げたい。

(西川・白井・角谷)

ZOOM版漫画トーク2020

人間科学研究科客員教授 団士郎

2020年8月29日の漫画トークはプロジェクトを継続してきて初めて遠隔地からの実施になった。

2011年から九年間ずっと、晩夏にむつ市を訪れ、マンガ展の開催されている市立図書館で、その年の展示作品への観客の反応を観察してきた。文庫版「木陰の物語」も会場で配布し、漫画トーク開演時刻までは、ページを繰りながら過ごしてもらおう。それらも合わせて漫画トークは成立していたから、今回のように、土曜日に単独のzoom開催では、複合感も実感しにくく、届き方もいつもとは異なっている感触だった。

一方、参加人数制限付きの事前登録制が採用されていたので、受講者が誰であるのかは明らかになっていった。全くの初参加という方はごく少数だったので、直接姿は見えないが手探りということとはなかった。

トーク内容は、来年に持ち越し開催になった漫画展のために用意した中から二作品、「アースカラー」と「ソロ泊」を見て貰って、感想を述べ合って貰い、その後、作者が思うことを述べるのを繰り返す二本立て形式にした。

それはライブでやっている無観客試合のような感覚だった。しかし、聞いて下さる方の個々の感触の分厚さは、全員ではないにせよ伝わってきた。一堂に会してその一人として聞くのとは、届くものに差を生じさせていたようだ。

話しやすさから言えば、ライブが一番だが、zoom 開催は、それとは別の近距離感覚もあって、それなりの良さも感じられた。

関西からむつ市まで出かけていく時間、コスト、エネルギーは大幅にカットされ、参加者もその時刻にむつ市図書館まで足を運ぶ負担から解放される。その事によって手に入るものと、失われるものには、いろんな意見があるだろう。

来年の漫画トークは、繰り延べの最終年をむつ市図書館から実施の予定だ。それがその後、どんな風にむつ市民の年中活動の中に溶け込んでいくのか、10年の蓄積がどのように活かされていくのかに注目したいと思う。

支援者支援セミナー9年を振り返る

人間科学研究科教授 中村正

むつで取り組んできた支援者支援セミナーの意義を確認しながら来年度（2021年度）に10周年となる本プロジェクトをどのように最終企画として実施するのか、さらに地元で継承・発展させていくかについてオンラインでミーティングを開催した。むつの関係者は市役所内の会議室からみなさんで参加し、立命館大学関係者は個別に Zoom に接続して開催した。2020年8月28日の午後1時30分から午後3時まで開催した。

画面で共有したスライドは簡単なものだった（末尾に掲載）。まず私からセミナーの目的について振り返った。振り返りの視点は「①支援者支援、②グループワーク、③事例検討、③ジェノグラム、④エコマップ、⑤家族システム論、⑥多職種連携、⑦地域（場）の力」の七点である。

むつの側で、杉浦さんらスタッフを中心に事前にその年のセミナーで報告して下さる事例をピックアップし、担当者と綿密な打ち合わせをしてもらっているので準備は十分にできている。現地に行く前に、支援者支援セミナーを担当する村本さんと相談をしながら、ポイントを決め、グループ討論の進め方を相談する。とはいえ、事例それ自身のもつ力があるので、大体は首尾よくすすむ。安心してセミナーを進めることができる。その力というのは、当該の家族のもつ力であり、事例にかかわるケースワーカーの力であり、地域の力の重なり合いである。特にセミナーは多職種連携となるようにグループの構成も工夫してもらっているのが当日は思いもよらない意見がでてくるのが面白い。参加者の職種、年齢、地区

等、多様性が年を重ねる毎に増していき、地域の子育て支援の力をむつの地域力として確認できる場となってきた。事例を提供してくれたこともあるむつのスタッフからもこの点の意義が強調されていた。「事例を振り返ることの意味」、「地域で子育て支援することの意味」について子育て支援に携わるむつの職員が、「たんなる研修会ではなく地域における自らの力や立ち位置の再確認ができる支援者支援セミナーの意義や子育てに関心をもつ人々がこんなにもたくさんむつににいることへの驚きを感じたこと」等、話してくださった。

そして立命館大学側から工夫したのは過去の参加者に登壇してもらい、むつプロジェクトに参加した経験がその後はどう活かしているのかについて振り返りつつ現在を語ってもらったことである。真鍋さん（2014年度から3年参加）、神山さん（2019年度参加）、野池さん（間接支援や後方支援の意義も含めて）である。

真鍋さんは、京都では比較的大きな非営利組織である「きょうと NPO センター」で働いている。NPO で市民活動の間接支援の仕事をしている。大学院を修了後も本プロジェクトに参加してくれた。この分野は 1995 年阪神淡路大震災後に活性化した。日本の NPO や市民活動は文字通り、震災とともに成長してきた。その後も幾度かの震災を経験してたくましくなった日本の NPO 活動を支援する仕事はこの支援者支援セミナーの趣旨そのものと重なることについて発言した。

神山さんは社会人院生として 2019 年度に参加した。看護師としての仕事にはずみがついたという。現在の研究が、遠隔地から人型ロボットを活用して仕事をするの実装可能性についての実践的な研究となっており、媒介するものさえあれば人は力を発揮するというアプローチなので、それをマネジメントする自分の仕事や研究を再確認できたことは間接支援としてのセミナーの趣旨と重なるとその意義を話してくれた。

野池さんは応用人間科学研究科の一期生で、震災当時はきょうと NPO センターで働いており、京都での避難者受け入れの仕事もしていた。むつ以外の東日本家族応援プロジェクトにも参加している。その後、有限責任事業組合まちとしごと総合研究所でシンクタンクを営しながら地域での社会的起業支援をしている。こうした仕事は「後方支援」と包括できる。京都から震災のことを風化させずに 10 年続けるプロジェクトの精神はどんな場合にも必要な事で、現在取り組む多様な後方支援の、とくに資金調達や活動助言の機能はよく似た役割をもつので仕事に活かしているという話をした。とくに後方支援の意味について、社会的起業の活動分野の広がりや意外性もあり、資金的援助の規模が大きく、この話は参加者に強い印象を残したようだった。

また、現役の院生たちからの不安の声として、支援者支援セミナーのグループワークに参加する際に自分に何ができるのだろうかという問いかけがあり、これまでの参加院生が「支援者でもない自分やむつのことを何もしらない自分が現地の方々からはそのこと自体が評価されることだといってくれたことが励みになる」と感想を述べていた。若い院生たちや遠くからの院生たちが遠隔地の自分たちに関心を寄せてくれること、熱心にグループワークに参加して耳を傾けてくれること、毎年誰かが来てくれることそれ自体が嬉しいことだと

いう地元の声を伝えてくれたのだ。そこに関心をもって存在していることの大切さを感じたと応答してくれたことに現役の院生たちは安心していただろう。

私は最後にこう述べた。プロジェクトは確かに企画として目に見えることを毎年決まった時期に取り組んでいるが、肝心なことはまず参加者ひとりひとりの人生の物語があり、それを充実したものにしていくためにプロジェクトに出会い、参加し、そこでどんな出会いがあり、自己物語として編んでいくのかということが大切だと思う。企画は氷山の一角ではない。みなさんが長い人生のなかでこのむつプロジェクトをどう物語るのか、10 年終わっても考えて欲しいことを述べた。その物語構築の手がかりに修了生の話があり、地元の方々の声があると話した。一期一会的な出会いであるが、その人の人生の物語こそが大切で、そうした機会に満ちているのが「危機の時代と社会だ」と思いこのプロジェクトに関与していると話をした。

そして、来年度に延びた 10 年目の最後の事業とむつ独自に開催出来る支援者支援セミナーのこれからについて、杉浦さんらむつのグループからは引き続き考えていく方向が示唆された。せっかくできた地域のネットワークをなんらかのかたちで継承していく取り組みへとつながっていけるとよいということでオンラインセミナーを終えることができた。

むつプロジェクト「支援者支援セミナーをふりかえる



- ①支援者支援
- ②グループワーク
- ③事例検討
- ③ジェノグラム
- ④エコマップ
- ⑤家族システム論
- ⑥多職種連携
- ⑦地域(場)の力



支援者支援セミナー:村本さんと中村が進行。
地元の事例提供者と対話しながらむつの家族を素材に。
院生も積極的に参加。

意見交換したいこと

とにかく、10 年間取り組みました。

毎年、事例提供を組織して下さったことに感謝いたします。

そこで、最終年度(2021 年度)をどうしましょうか。

下北での子育て支援は続きます。

立命館大学でも多様に支援者支援を続けます。

むつプロジェクト

対人援助学領域 M1 西川ゆかり

今回むつプロジェクト担当として、この9年間むつ市と立命館が行ってきたことについて調べ、発表した。年に1回ではあるが、毎年同じ地に出かけ、現地の人々と同じ時間を共有することに大きな意味があると、今回のプロジェクトを通して感じる事ができた。今回は残念ながらリモートでの開催となったが、10年目という節目を迎える前に一度立ち止まって振り返り、また10年以降どうしていくのか考える時間が持てたことは、このプロジェクトにとっても有意義な時間だったのではないかなと思う。そこに関わることができ、貴重な経験をさせていただいたと感じている。

実際に、現地スタッフの方とリモートで繋がる事ができ、このプロジェクトに対する思いを聞かせていただいた。毎年むつからこのプロジェクトがスタートすることを「むつはプロジェクトをけん引する役割を担うという意義も感じている」と表現してくださって、むつのことだけではなく、このプロジェクト全体のことで考えてくださっていることに驚いた。そんな現地スタッフの思いもあり、10年続けることができていたのだと感じた。

むつ市では毎年、支援者支援セミナー、お父さん応援セミナー、漫画展・漫画トークを開催している。その中でも特に今回は、支援者支援セミナーについて振り返りの時間が多く取られた。毎年多くの支援者が集まるこのセミナーは、年々参加する職種の数も増え、多職種が交流できる貴重な場となっている。地元むつの家族支援に関する事例について、多職種の小グループで、地域の力を活かす支援を考える。むつならではの意見が出る他、院生もそのグループに入ることで、外からの視点もあり議論が活発になるのだという。また、事例提供者は、参加者や立命館の先生から「大変なケースをよくやっている」「むつには力がある」と評価してもらえることで報われているという。認められると励みにもなるし、今後の活動の力に繋がる、ともおっしゃっていて、このセミナーの意義を感じる事ができた。

このセミナーを通して、「地域で暮らす家族に寄り添う支援者の連携・ネットワークをはぐくむ」という杉浦さんの言葉が印象的だった。「はぐくむ」というのは長期的に実施してきたセミナーだからこそ言える、とおっしゃっていて、このセミナーをこれからも続けてほしいと強く思った。しかし、むつでは行政が中心となって実施している為、業務の中で続けていくことの難しさもある。現地でもさまざまな葛藤があると思うが、このプロジェクトを10年続けてきた中でむつの強みもたくさんあり、それを活かしていくことで多職種連携を「はぐくむ」場を引き続き作れるのではないかなと感じる。むつの方たちが今後どのようにこのプロジェクトを展開させていくのか、来年むつに行くことができれば、ぜひ直接学びたい。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2020」に参加して

臨床心理学領域 M1 白井あかり

今回むつプロジェクトの担当となり、私は下北地域と原発について調べた。むつ市や下北地域について調べていったが、様々な情報を得て、実際に行くことができなかったが学びの深いものになったように思う。9年の振り返りもどのような事をして、実際どう変化したのかを知ることができてよかった。フィールドワークからということで現地へ行った先生から紹介されたが、現地に行ったからこそ得ることのできた情報を紹介され、私は震災前までの情報しか知らなかったため、現在の様子を知り、震災前との比較が出来て、さらに学びを深めることができた。また、恐山と口寄せ文化については、ネットに挙がっていないような現地の生の声を知ることができて非常に有意義であったと思う。

支援者支援セミナーの振り返りについては、現地の方や修了生の声を聞くことができた。今まで続けてきた企画が現地の方達にとってどのような意味合いがあったのか、今年のリモート開催のため、振り返りという形で開催されたが、1度立ち止まってみんなで振り返るという作業は意義のあることだったと思う。特に修了生の方が皆さん支援する仕事に携わっていて、このプロジェクトの目的の1つである支援者支援に繋がっている様子がわかった。また、知らないからこそできることがあると仰っていたので、これから援助職者になろうとしている私にとって自信に繋がった。また、来年以降続けていくための課題というものも見えたように思う。プロジェクト自体は10年の区切りという形で終了するが、10年続けることができたという事実があるため、支援者支援セミナーは地元の方先導でこれからも続けていくことが可能な企画であると思う。

団先生の漫画トークでは、アースカラーとソロ泊という2つの漫画について話されていた。アースカラーでは、服装の雰囲気を変えることで自身の気分も上げられたという漫画だったが、たしかに日常生活においてもモードというものがあって、服やメイクと自分の感情はリンクしていると思う。また、このアースカラーの登場人物に対して、人間関係など当たり前のことを聞くのではなく、目に見えることを指摘したという団先生の援助職者の在り方というものも参考になった。ソロ泊は、現地の方に「これから1人で空を見上げることが増えるよ」と言われたことが印象に残っていて、長い人生1人で戦うことが増えて、ふと1人になる時間が図らずも糧になることがあるのかなと思った。

全体を通して、今年はリモート開催だったためどうなるか不安だったが、無事に終えられてよかったと思う。漫画トークでは、実際に3人ほどのグループに分かれてリモートで意見交換を行ったが、互いに離れた場所にいるのにも関わらずとても近く感じた。リモートのため、現地に行けなくとも繋がることができるというのはリモートの大きな強みであると思う。しかし、フィールドワークといった、自分の目で現地を見ることができないというのは歯がゆい思いをした。現地に行くからこそ味わえる空気感、雰囲気というものがあると思うため、少しリモートによる物足りなさも感じた。来年は可能ならば現地へ行きたいと思う。

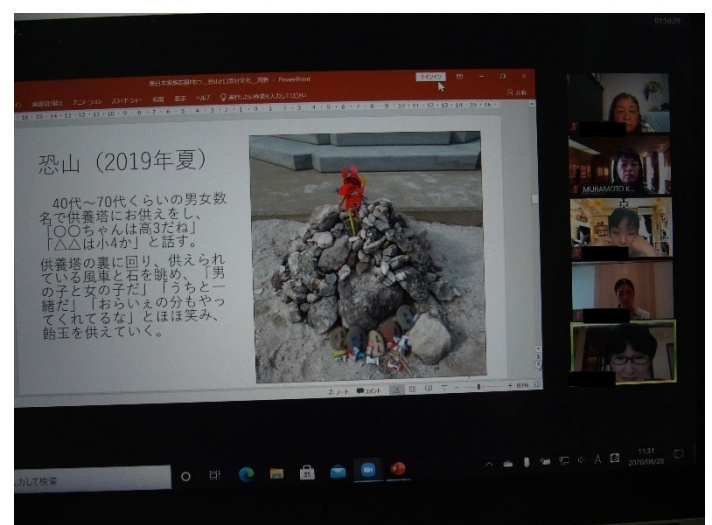
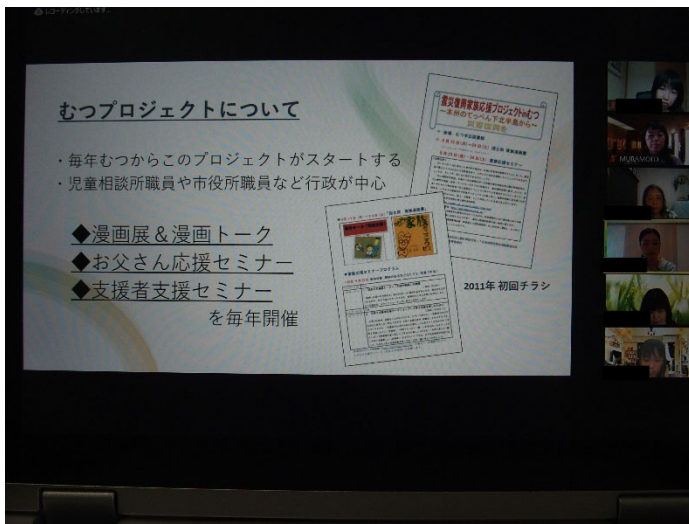
「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」に参加して

対人援助学領域 M1 角谷葉月

むつ市は東日本大震災で大きな被害はなかったものの、被災地への後方支援として重要な役割を果たした。このプロジェクトも「本州の最北端から家族の笑顔を」というサブタイトルのもとにむつから開始する。この地は東北の他の被災地を牽引する役割があるのではないかという言葉の通り、今年もこの地からスタートを切った。

私は青森県に行ったこともなく、知識もほとんどなかった。このプロジェクトに参加しなければ、この地を選択しなければ手に取ることもなかったであろう、様々な資料を手に取った。調べていくうちに青森の豊かな自然と、東北の歴史や文化に興味・関心が広がった。青森に魅了された私の夏が始まった。コロナで旅行も行けなかったが、私のプロジェクト担当箇所がむつ・下北の概要だったこともあり、観光地や歴史を調べていくことでちょっとした旅行気分を味わうことができた。下北半島の歴史を辿ると、過酷な自然環境の中で土地を開拓し、生き抜いてきた力強さを感じる。強大な自然の力による数々の自然災害の経験、海と共に生きることで死と密接にならざるおえないことなどから、東北地方独特の文化や死生観、恐山への信仰などが生まれてきたのだらうと思う。雄大な自然がある一方で、自衛隊・米軍基地などの軍事施設の密集地であること、原子力発電所と原発からの廃棄物の処理工場がある地としての一面もある。現地に行きたい気持ちは強くなっていったが、今回はリモート開催だったため実際に現地に足を運ぶことはできなかった。しかし、プロジェクト当日は実際に現地に行ったことのある先生や院生、修了生、現地の人から話を聞くことで、学びを深めることができた。

支援者支援セミナーの振り返りで、杉浦さんの「災害に限らず、誰にでも起こりうる家族の災難を乗り越える地域の家族力の向上を」というお話が印象的だった。団先生の言葉を借りれば、幸も不幸も含め何もない人生などない。支援者も支援される側にも、誰にでも家族の存在があり、その輪が地域力につながるのではないだろうか。プロジェクトの9年間の振り返りを通して地域で暮らす家族に寄り添い、支援者の連携・ネットワークを育み続けてきた軌跡と、地域力の強さを感じた。人と人との繋がりを作る場の提供として、このプロジェクトの支援者支援セミナー、団士郎漫画展・漫画トークなどが役割を果たしているのだと感じた。現地からは、支援者支援セミナーを続けたいという思いがある一方で、このプロジェクトが終わりを迎えることへの不安感も聞かれた。先生や院生の言葉を聞くと、地域力は確実についてきているので、プロジェクト終了後も継続できるという力強い言葉が多くあり、地域の力で続けてきたことをバネに、継続した支援者支援を今後も育み続けて欲しいと思った。地域には今まで築き上げてきた歴史や文化があり、そこで暮らす人々がいる。外部から支援するからこそ入れられる風と、地域の力の融合をプロジェクトを通して感じることができた。また、その地を知ること、地域の人々がお互いを知ることによって寄り添い、土地に合った支援や連携を図ることができるということを学んだ。



東日本・家族応援プロジェクト2020inむつ リモート

共催・立命館大学大学院人間科学研究科,むつ市,むつ市連合PTA,下北地域県民局地域健康福祉部（青森県むつ児童相談所）

東日本大震災が発生した2011年から始めたプロジェクトは今年10年となりました。

今年度はコロナ禍の影響で、一堂に会しての開催は次年度に持ち越し、

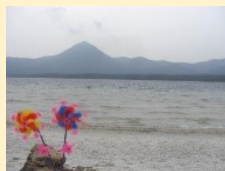
リモートでプロジェクトを開催いたします！！

8/28(金)

10:00～12:00

むつプロジェクトの9年を振り返る

- ・むつ・下北・青森の概要とむつPの9年のまとめ
(報告：むつP担当院生チーム)
- ・下北半島フィールドワークから
「あさこハウス」ほか原発関連施設
(報告：村本 邦子)
- ・恐山と口寄せ文化
(報告：D3河野 暁子)



13:30～15:00

むつプロジェクト支援者支援セミナーを振り返る

今後を見据え、これまでの支援者支援セミナーの成果や課題をセミナーに参加してきた現地担当者4名、参加した修了生3名が、対人援助職者として参加したことがどう活かしているのか振り返り、これからを考える
(担当：中村 正)



8/29(土)

10:30～12:00

団士郎漫画トーク

家族はたくさんの思いがけない悲しみや苦しみも運んできます。しかし一方、家族を得ることが、こんなにも自分の人生を豊かにしてくれるのだと実感する人もたくさんいます。そんな家族への思いから作られた「木陰の物語」。活動10年目を迎えた今の気持ちなどをお話したいと思います。



団士郎家族漫画展

8/11～8/30

むつ市立図書館展示ホール
で開催中！



東日本 ・ 家族応援プロジェクト in むつ

8月11日（火）～8月30日（日）

団士郎家族漫画展

入場無料 むつ市立図書館 展示ホール

（8/27 休館日を除く）



作者 団士郎 プロフィール

立命館大学大学院応用人間科学研究科教授。公立の児童相談機関心理職25年を経て独立「仕事場D・A・N」主宰。家族療法の実践をしながら、講演やワークショップを全国で展開漫画家としても多数作品を発表している。

問い合わせ先 むつ市立図書館 電話 0175-28-3500

共催 ・ 立命館大学大学院人間科学研究科
・ むつ市・むつ市連合PTA
・ 下北地域県民局地域健康福祉部
（青森県むつ児童相談所）

後援 ・ 青森県教育委員会 ・ むつ市教育委員会
・ むつ青年会議所 ・ 下北里親会 ・ むつ市社会福祉協議会
・ みちのく福祉会 ・ 桜木会 ・ 並木福祉会 ・ はまなす愛育会
・ むつ中央福祉会 ・ たいよう福祉会 ・ 心光会 ・ ひばの実会



団士郎漫画トークのご案内

2011年から毎年むつ市立図書館で開催しております「団士郎漫画トーク」！
今年はZOOMによるオンライン配信で開催します！

◆ 日 時 : **8/29(土)**
10:30~12:00

◆ 定 員 : **30名**

◆ 参加費 : **無料**



講師：団 士郎

立命館大学大学院人間科学研究科客員教授
家族療法家・漫画家
公立の児童相談機関心理職25年を経て独立。
「仕事場D・A・N」主宰。
漫画家でもあり、「かぞくのじかん」（婦人
之友社）ほか数誌に「木陰の物語」連載中。
マンガ集団「ぼむ」同人、web雑誌「対人
援助マガジン」編集長



- ◆ 参加条件 : Zoomを使ったオンラインでのトークとなります。
インターネット環境があり、パソコン（カメラ・
マイク内蔵、もしくは別にセットしたもの）もし
くはスマートフォンの準備が必要です
- ◆ 申込期間 : 8月17日（月）9:00~20日（木）17:00
* 申込期間中に定員に達した時点で、締切らせて
いただきますのでご了承ください
- ◆ 申込方法 : <https://forms.gle/9sLG3e1t6GQMPQBz5>
または下記QRコードよりお申込みください



<お問合せ>

立命館大学大学院人間科学研究科
震災復興支援プロジェクト
東日本・家族応援プロジェクト事務局
Email : ejfspj2011@gmail.com